

太陽神タブレットのテキストとイメージ

細 田 あ や 子

はじめに

現在大英博物館に所蔵され、太陽神（シャマシュ）タブレットとよばれている石板（BM 91000）は、メソポタミアにおける神の顕現や神の表現、神殿の儀礼についてきわめて興味深い問題を投げかけている（図1）。1881年、H. ラッサム（H. Rassam）によりイラクのシッパル（Abū Ḥabbah）で発掘された石板である。シッパルはシャマシュを祀っている都市。灰色の片岩（シスト）からなり、高さ29.21cm、幅17.78cmである¹。

この太陽神タブレットについては、これまで多くの文献で取り上げられてきた。レリーフの図像やそこに刻まれたキャプションの解釈が容易ではなく、さまざまな解釈がなされてきた。また、このタブレットの図像に見出される古代的な要素について、テキストに書かれた神像の図案モデルの発見という物語とあわせて論じられることが多かった。そのような研究状況のなか2004年のC. ウッツの論文が、それまでの問題点を踏まえテキストと図像の双方から詳細に分析し、現在もっとも信頼できる論考である。以下ではウッツの研究にもとづきながら考察を進め、また同時代の作品も視野に入れて論じてゆく。このタブレットがクドウル（*kudurru*）という作品ジャンルの一つに属するというをおさえ、クドウルとしての特徴を検討する。

この作品に込められた内容は、碑文テキストとレリーフ彫刻とをあわせて読み解くことにより明らかになる。それは、太陽神を祀った神殿の儀礼、神像制作の儀礼、太陽神の像・イメージの意義、祭司職、祭司禄についてなど、儀礼

¹ Rassam 1897, 401-402; King 1912, 120-127, BBSt 36. 大英博物館のhpによると石灰岩。



図1 太陽神タブレット シップル出土 大英博物館 (King 1912, pl. XCVIII)

や伝統についての考え方である。紀元前1千年紀前半のバビロニア人—— シッパルのエバツバル神殿に仕える祭司たち—— が神殿儀礼に関して行った伝統の遵守と、神のイメージに対する考え方をこの石板から読み解くことを試みる。メソポタミアにおける神像の役割と、神を視覚化すること、その描写の意味などをさらに考察するための論点を明確にしてゆこう。

1. クドウル

太陽神タブレットには表面の上部、三分の一の部分にレリーフが施され、その下と裏面にテキストが書かれている。テキストは表面に三欄、裏面に三欄となっている。

この石板はバビロニアのナブー・アプラ・イディナ王 (Nabû-apla-iddina) の治世の時代 (紀元前885頃-851年)²の31年目に発行されたことがテキストに書かれており (VI 28)、およそ紀元前854年頃の制作と考えられる。碑文の内容や構成、語法からみて、このタブレットはバビロニアのいわゆるクドウル (*kudurru*) の作品群のジャンルに入る³。

1.1. クドウルの名称、形態、内容、機能

クドウルとよばれる作品群は、バビロニアで紀元前14世紀初期から7世紀中期のあいだに制作された、テキストと図像が施された石碑や石板である (粘土製のものもわずかにある)。テキストの内容はおもに、王からある個人が土地などの給付を受ける権利、資格があることを公的に示すものである。どこの土地がどのくらい与えられるのかということが明示される。土地のほか、物品の授与、土地の税の免除、神殿の祭司たちの禄・報酬を定めたものなどがある。そのような受給権に関する契約の内容を記録として石に刻み、公に提示し記念として残すという意図で制作された。

² Brinkman 2007, 32によると、ナブー・アプラ・イディナ王は851年に死亡したことが Calah (ニムルド) 出土の碑文から確定できる。

³ Slanski 2000, 105-112; Slanski 2003, 196-221; Woods 2004, 40.

クドゥルとその断片は160点ほどある。現在のクドゥルのなかで最古のものは前14世紀初めの作と思われる粘土製のものだが、図像は描かれておらず装飾はない⁴。

クドゥルに関しては、歴史的資料、あるいは法的資料という側面からの研究や、図像学的視点からの研究など個別の観点に分かれていたが、2003年の K. スランスキの論考（1997年に提出された博士論文が土台となっている）が、それまでの成果を踏まえクドゥルを包括的に捉えようとした。クドゥルの名称や定義、碑文テキストの構成、テキストと図像との関係などについて論じられている。このスランスキの研究に対しては、J.A. ブリンクマンの詳細な書評があり（Brinkman 2006）、批判される点も少なくないため、クドゥルについては両者の議論を参照しながら考察しよう。

これまで伝統的に、碑文テキストと図像が刻まれた石柱、石碑、石板など石製のモニュメントは、アッカド語で *kudurru* といわれ、boundary stone, boundary (line), boundary marker, Grenze, Grenzstein, 境界石などと訳されてきた⁵。しかしスランスキによると、このようなモニュメントは *kudurru* ではなく *narû*（石柱、石碑）、石製の記念碑とよぶべきで、また境界石という訳語も適切ではない（ある土地と土地の境界を示す場所に設置されたわけではない）。それは碑文テキストからも明らかで、王によって授与される土地の場所や敷地の広さなどの内容が書かれた石のモニュメントそのもののなかで、その石のことを *narû* といっているからである。*kudurru* という語も、このような石製モニュメントのなかで境界という意味で使われているが、何か具体的なものの境界を指し示すわけではない。したがって実際にバビロニアで作られ、用いられたような機能を果たす石製の作品のことを *kudurru* と呼ぶことは不適切である⁶。

narû（石柱、石碑）に刻まれた碑文テキストの内容——王による土地や神殿の祿の授与、あるいは王にはよらない授与など、給付を受ける権利を示したものの——をかながみると、entitlement *narû*、あるいは entitlement monument ——

⁴ Brinkman 1980-1983, in: *RIA* 6, 268; Slanski 2003, 7; Brinkman 2006, 2.

⁵ *AHw* I, 499-500; *CAD* 8, 495-496.

⁶ Slanski 2003, 19-55, とくに37, 53-55.

(土地などの) 給付証碑, 授与を証明した石碑 —— と呼ぶのがふさわしいとしている⁷。

名称に関するスランスキの説に対し、ブリンクマンは反論している。彼によると、スランスキはこの造形作品の定義を明白に提示しておらず、彼女があげた碑文テキストだけで名称を *narû* とすることは説得性に欠ける。ブリンクマンは、これまで *kudurru* とよばれてきた造形作品には、五種類の形態があると指摘する。レリーフが施された古典的な石柱 (*stelae*), レリーフが施された石碑 (*stone plaques*), レリーフが施された石板 (*stone tablets*), レリーフがない石板 (*stone tablets*), 装飾のない粘土製の円錐形 (*clay cones*) という五種類である。そのうち、レリーフが施された石板, レリーフがない石板, 装飾のない粘土製の円錐形という三種のなかで、それ自身を *narû* と指示する例はまだ見つからないという。*narû* という語が、このタイプの作品についてもっともよく使われている語ではあるが、*kudurru* も間違った名称ではなく、バビロニア人も *narû* と同じ意味でこの語を使っているとしている。さまざまな形態があるので、それを顧慮して名称をつけるべきである。スランスキが提唱する *entitlement narû* という名称も同意できるが、バビロニア人もそれと同様の意味で *kudurru* の語を使っている例があるので、同様に現代の研究者が *kudurru* の語を用いても責められることはないだろうとしている⁸。

本稿では境界石という訳語は避けるが、ある特定の地域、時代 —— バビロニア、紀元前14世紀から7世紀 —— において制作され、土地をはじめとするものが王によって授与されるという法的文書、契約の提示という機能を持ち、かつ特徴的な図像が見出されるこのような石製の作品を、クドゥルという名称で扱う。

給付の権利についての証書、石碑であるクドゥルは神殿に置かれ、土地の境界を示す地点に置かれたのではないということも、資料から明らかにされている。碑文によると、*narû*, クドゥルは神々の前に設置されたと書かれており、

⁷ Slanski 2000, 98, 112-114; Slanski 2003, 114-115. Slanski はもともとは Brinkman/ Dalley 1998, 76があげた *entitlement* という語をさらに精緻化して論じている。Woods 2004, 40 n. 80.

⁸ Brinkman 2006, 3-10.

考古学的資料によっても、物事の給付のとりきめを公に提示することが第一の目的であるクドゥルの本来の場所は神殿だったと推測されている⁹。

太陽神タブレットも神殿にあったものが発掘されている。しかもナブー・アプラ・イディナ王のあとの時代に作られた保管用のテラコッタ製の箱に入っていた (BM 91004)¹⁰。神の前、あるいは神の近くに置かれ、貴重なものとして保存されていたと考えられる。

1.2. クドゥルの碑文テキストの構成

クドゥルに刻まれている碑文テキストは、大きく二つの部分に分かれる。それは、王から個人への土地や物品の授与の契約、発効についての記述 (Operative division) と、その権利が侵害された場合、神から呪いを受けるだろうという警告の記述 (Imprecative division) である¹¹。そしてさらに、調印やその契約の証人、日付、その前後に表題や結語 (奥付) が加わる。

スランスキは、クドゥルのテキストを以下のように13の構成要素に分けている¹²。だがブリンクマンによると、クドゥルのテキストの内容構成はきわめて多岐にわたり、このように統一的な構成パターンにまとめることはできないという。クドゥルのテキストに、スランスキのあげた13の構成要素がすべて入っているわけではなく、とくに前8世紀以前のクドゥルには、それよりも少ない構成要素で成り立っているものが多いと指摘している。13の構成要素は、クドゥルのテキストの可能な最大の特徴のレパートリーだという¹³。

⁹ Brinkman 1980-1983, in: *RIA* 6, 270; Slanski 2003, 19, 36, 55-63ほか。

¹⁰ Rassam 1897, 402; King 1912, 120; Rashid 1967, 306-307; Powell 1991, 20-30; Woods 2004, 25など。その箱にはさらに太陽神タブレットからとった粘土板の印影 (BM 91001, 91002) が入っていた。

¹¹ Slanski 2000, 98ほか, Slanski 2003, 101, 166; Slanski 2003/2004, 312, n. 19. SlanskiはBrinkman 1980-1983, in: *RIA* 6, 268が、物語の部分 (narrative) と呪いの部分 (imprecation) に分けた見方にもとづき、さらに細分化している。

¹² Slanski 2003, 101. 同様の記述は同書167にもあるが、多少の相違があり不統一である。さらにSlanski 2003/2004, 313でも構成について述べられているが違いがある。Brinkman 2006, 10が指摘しているように、Slanski 2003の本では、統一されるべきことがらが統一されていない場合がある。

¹³ Brinkman 2006, 10-13. スランスキの論考でも、13の構成要素すべてがそろってはいないクドゥルが取り上げられている。

Heading	表題
1 name (of the <i>narû</i>)	石柱・石碑・石板の名称
Operative division	受給の発効に関する記述
2 narrative	物語
3 paean	賛歌
4 description of land/ prebend/ exemptions	土地, 祭司禄, 義務や税などの免除など, 受給 や解除についての記述
5 statement of surveying	授給するものについて
6 statement of the event	受給権を与えることについての言明 (誰々が 誰々に授与した, という言明)
7 list of witnesses	証人のリスト
8 statement of sealing	調印についての言明
Imprecative division	呪いに関する記述
9 prohibitions	禁止
10 curses and/ or bless	呪いと / または祝福
Closing	結語
11 date	日付
12 colophon	奥付
13 name (of the <i>narû</i>)	石柱・石碑・石板の名称

2. 太陽神タブレットの碑文テキスト

2.1. 碑文テキストの文字, 言語

太陽神タブレットの碑文テキストの文字の綴りかたや言語は, 古拙的, 古代的, つまりそれより以前の古い時代に属するよう復古的にした新バビロニア語とみなすことができる¹⁴。使用されている言語は, このタブレットより約100年

¹⁴ Slanski 2003, 211.

前の中期バビロニアのクドゥルの言語とほとんど同一であり、意図的に古い時代のもののように見せている¹⁵。

2.2. 碑文テキストの構成と内容

太陽神タブレットの内容は、バビロニアの王、ナブー・アブラ・イディナにより、シッパルのエバツバル神殿に仕える *šangû* 祭司かつ *bārû* 卜占師(予言者)ナブー・ナディン・シュミへ、彼が失われたシャマシュの像の復興に貢献したことに對し、食料など報酬、禄が受給されることを承認、保証したものである。スランスキの分類によると、土地以外のものを授与する記録となっている¹⁶。クドゥルでは土地の授受に関する文書がもっとも多いが、このタブレットはそれ以外のものの授受に関する証書である。

スランスキにもとづいてテキストの構成を概観すると以下ようになる¹⁷。

Operative division	受給の発効に関する記述
I 1- IV 46 ¹⁸ narrative	物語
IV 47 -VI 8 description of the (sinecure) / prebend	<i>šangû</i> 祭司に給付される割り当ての記述
VI 9-13 statement of entitlement event	給付の受給権の記述(誰々が誰々に授与した、という言明)
VI 14-26 sealing and list of witnesses	調印と証人のリスト
VI 27-29 date	日付
VI 30-31 “Copy of the royal seal of allocations”	配分・割り当てについての王の印章の写し ¹⁹

¹⁵ Woods 2004, 89.

¹⁶ Slanski 2003, 312.

¹⁷ Slanski 2003, 211-212. King 1912, 120-127. さらに物語の部分の構成については Hurowitz 2000, 364-368も参照。

¹⁸ Slanski 2003, 211 では、物語の部分は IV 42 までとなっているが誤り。Slanski 2007, 54では IV 46と訂正されている。

¹⁹ この石板はおそらくは粘土板の原本(オリジナル)にもとづいている。印章はオリジナル

Imprecative division

VI 32-44 prohibitions

VI 45-55 divine curses

呪いに関する記述

禁止

神の呪い

食料などの受給権がエバツバルの *šangû* 祭司かつト占師（予言者）に与えられ、その権利を侵害する者は誰であれ、神の呪いを受けるということが記されている。だがそれだけではなく、そこへ至るまでの神殿儀礼や捧げものに関する約200年のあいだの出来事が巧みに物語られている。テキストの行数からみても、I 1- IV 46の物語に多くの記述があてられている。その物語の概略と *šangû* 祭司に給付される割り当てについての記述は以下のとおりである。

- ・アッカドの国の混乱と困難のなか、ストゥ族の攻撃を受け、エバツバルが破壊され、シャマシュ像が消失してしまう（I 1-12）²⁰。
- ・その後、シムバル・シパク（Simbar-šipak 1026-1009）がシャマシュ像を探すが見つからない。代わりに太陽の円盤を神殿に捧げ、そのための規則正しい捧げものを設立する（I 13-23）。
- ・だが、次のカシュ・ナディン・アヘ（Kaššu-nādin-aḥḥe 1008-1006）のとき、苦境や飢饉のため規則正しい捧げものが中断される（I 24-28）。
- ・エウルマシュ・シャキン・シュミ（Eulmaš-šākin-šumi 1005-989）のとき、*šangû* 祭司かつト占師（予言者）エクル・シュマ・ウシャルシ（Ekur-šuma-ušarši）の要請により、規則正しい捧げものが復活する。エクル・シュマ・ウシャルシは儀礼を捧げることを委任される。1リットルのパン、1リットルのビール、バビロンの新しい町の一画の庭が彼に託される（I 29-II 17）。

の粘土板に調印され、この石板はその写しと考えられる、Woods 2004, 43. 石製のクドゥルに印章で刻印をすることはできない。粘土板に調印されたものがオリジナルで、法的証書として有効である。それは給付を受けた所有者に保管される。それに対して石製のクドゥルは、法的行為の効力を強め確認する記録文書である。そのため、文書を公的に展示するという機能が大きい。Brinkman 1980-1983, in: *RIA* 6, 269-270.

²⁰ テキストには書かれていないが、ストゥ族の攻撃はアダド・アブラ・イディナ（Adad-apladdina 1069-1049）の時代に始まった、Woods 2004, 41.

- ・ナブー・アブラ・イディナ (Nabû-apla-iddina c. 885-851) がストゥ族を打ち破る。シッパルの *šangû* 祭司かつト占師 (予言者) ナブー・ナディン・シュミが、ナブー・アブラ・イディナに、ユーフラテスの西岸で見つかったシャマシュの像の粘土のモデル・型を示す。ナブー・アブラ・イディナは、この型にもとづいて新しい儀礼像を作ることを命じる。さらに、ナブー・アブラ・イディナは儀礼を再建する。肉、魚、野菜、穀粉、ビールなどの豊富な捧げものを設立する (II 17-IV 46)。
- ・*šangû* 祭司 (ナブー・ナディン・シュミ) は、義務と歳入のおかげで多くの分け前を受ける。さらに1リットルのパン、1リットルのビール、バビロンの新しい町の一画の庭という、象徴的な贈り物を受ける。これは、かつてエウルマシュ・シャキン・シュミがナブー・ナディン・シュミの先祖、エクル・シュマ・ウシャルシに与えた捧げものと同じである (IV 47-V 38)。
- ・ナブー・アブラ・イディナは、ルブシュトゥ儀礼²¹のための日程と衣類の捧げものを設定する (V 39-VI 8)。

ここから読み取れるのは、この太陽神タブレットの主要テーマが、エバツバル神殿儀礼の復興、シャマシュ神像の復元、再建だということである。エバツバル神殿とシャマシュの儀礼像の2世紀にわたる歴史が物語られているのである。ストゥ族の攻撃によりエバツバル神殿は荒廃しシャマシュ神像は消失するが、シャマシュの恩恵でもってその神像の粘土板の模型が発見されたことにより、神像が作られ、ふたたび儀礼が行われ、神殿への捧げものが復活した。模型を発見した *šangû* 祭司かつト占師・予言者のナブー・ナディン・シュミが復興の貢献者として、ナブー・アブラ・イディナ王により、さまざまな食料の給付を受けたのである (王の割り当ての半分にあたる)。

²¹ この衣装献納式については、Matsushima 1993, 211-215; Matsushima 1995, 235-243; 松島 2001, 133-157など参照。

3. 太陽神タブレットのキャプションとレリーフ画像

3.1. キャプション

レリーフのなかに三箇所、キャプションが刻まれている。ウッズの読解を参照すると次のように翻訳できる（図1）²²。

(1) 画面左側の余白：

<i>šal-lam</i> ⁴ UTU EN GAL	偉大なる主，シャマシュの像。
<i>a-šib É.BABBAR.RA</i>	シッバルの中心のエバツバラに
<i>šá qé-reb UD.KIB.NUN^{ki}</i>	居住している方。

(2) 画面右上の端，神殿を示す建築物の上：

<i>⁴30 ⁴UTU u ⁴15 ina pu-ut ZU.AB</i>	シン，シャマシュ，そしてイシュタルが，アプ スーと向かい合って，
<i>ina bi-rit ⁴MUŠ ti-mi ŠUB.MEŠ-ú</i>	ニラー（神）（と）柱とのあいだに置かれている。

(3) シャマシュ像の左横（三つの神々のシンボルの下）：

NIMGIR ⁴ UTU	シャマシュの使者，
MUŠ.IGI.MIN	二つの顔をもった蛇。

3.2. 太陽神シャマシュ

キャプション(1)は，レリーフの右側にいる太陽神シャマシュを説明したものである。エバツバル神殿に存在していること，祀られていることが強調される。

シャマシュは横向きで描かれている。彼は神であることを示す角冠（四重に

²² Woods 2004, 62, 83. Slanski 2000, 110-111; Slanski 2003, 198なども参照。

なっている)をかぶり、段がつけられた細かいひだ模様様の長衣を着て玉座に座している。このひだ模様様の長衣は初期王朝期の印章図像から見出されるモチーフである。右手に棒と輪を持ち、前方へ掲げている。これらは、王権や秩序、正義を示す持物とみなされている²³。左腕はひじを曲げ、手のひらが長いあごひげの上に置かれているか、あるいはあごひげをおさえているかのように見える。耳の横、首の後ろに、束ねた髪をまとめたシニョンが見える。

シャマシュが座している玉座は背もたれのない箱型になっている。その側面の四角形のなかに二体のバイソン人間——角冠をかぶり²⁴神格化されている——が後ろ脚で立っている。彼らはそれぞれ脇の柱に手をあてながら立っている。メソポタミアにおいてバイソン人間、人間の顔をしたバイソンは、シャマシュと関連づけられており、シャマシュの追随者とみなされている²⁵。バイソンが、シャマシュ神の両脇の柱に立つ図像もある(図2)。玉座の下には小さな円の並びが二列あるが、これは山を示す場合が多く、メソポタミアの図像では神の住む場所とされる。玉座は太陽神の朝の日の出を象徴する²⁶。



図2 円筒印章(コロン1996, 図765= Collon 2007, fig. 6)

シャマシュの左の頭上に、三日月、四個の突起の星と波線、八個の突起の星が描かれているが、これはクドウルにもよく見出されるもので、シン、シャマシュ、イシュタルのシンボルである(これについてはキャプション(2)で言及されている)。

²³ これらは土地の分配に関する測量の道具とみなされ、そこから秩序や正義などの象徴とみなされている。Collon 2007, 63; Wiggermann 2006-2008, 420-421; Slanski 2007, 41-45など。しかし前川2011, 81-93によると、輪はもともとは神の戦闘勝利につづく被征服民の管理というモチーフと関係がある。神が棒、輪(と縄)を王に示すことは、王が征服地を支配することが神によって委託されることを意味すると考えられる。

²⁴ Black/ Green 1992, 94の図73参照。

²⁵ Wiggermann 1992, 174, 176, n.10; Woods 2004, 54, n.153.

²⁶ Woods 2004, 57.

(1)のキャプションは、碑文テキストの冒頭部分「偉大なる主、シヤマシュ。シッパルの中心のエバツバラに居住している方」(I 1-3)とほとんど同じ文言である。テキスト冒頭の文章は、このタブレット全体の表題とみなすことができよう。だが留意すべきは、キャプションでは「偉大なる主、シヤマシュの像」と *šalum* の語が一番初めに加えられていることである²⁷。シヤマシュそのものと、シヤマシュの像という違いが明確にされている。像・画像という意味で *šalum* の語が使われ、キャプションがレリーフの画像の説明としてシヤマシュを指し示している²⁸。

3.3. 太陽の円盤

画面中央には、星が大きく描かれた円盤がある。その星のあいだには、三本の波線からなる波状の帯が、星の中央から四東ひろがっている。星の中央にはさらに円がある。これは、太陽を示す円盤で、太陽神シヤマシュのシンボルである²⁹。シヤマシュの頭上にある三つのシンボルのうちの中央のそれと同様である。

この太陽の円盤が設置された台座³⁰にはロープがつながっており、上方にいる、二体の上半身の像がそのロープをつかんでいる。円盤の下の基部にはイオニア式装飾のついた土台があり、円盤を支えている。さらにこのイオニア式装飾の土台は、山を示す列の上に置かれている。左から近づいてくる三人の人物に比べると、台座と円盤はきわめて大きい。

3.4. 三人の人物

画面左から三人の人物が列をなしてシヤマシュの座す神殿のほうへ近づいてきている。先頭がシッパルの *šangû* 祭司かつト占師（予言者）、ナブー・ナディ

²⁷ Slanski 2003, 209.

²⁸ クドゥルのなかのキャプションについては Slanski 2003, 133-142; Slanski 2003/2004, 322. クドゥルのなかで *šalum* という語は、人間と同じ姿の神々や人間などの像に対して使われ、神々のシンボルに対しては使われていないという指摘は重要である。

²⁹ サルゴン時代から認められる。Seidl 1957-1971, in: *RIA* 3, 485; Woods 2004, 50.

³⁰ 円盤の置かれた台は、King 1912, 121によると祭壇。

ン・シュミ、その次がバビロニア王、ナブー・アブラ・イディナ、三番目がとりなしをする女神と考えられる³¹。とりなしをする女神は三重の角冠をかぶり、シャマシュと同様、縦線の細かいひだ模様の衣服を着ている。三人の大きさは、先頭の *šangû* 祭司が一番小さく、続いて王、女神と少しずつ大きくなっている。

先頭の *šangû* 祭司は、左手で円盤の設置された台座の脚をつかんでいる。右手で後ろから続く王を前方へ導くように王の左手を握る。王は右手を自分の顔(鼻)の前にあげる身ぶりです歩を進める。このしぐさは、嘆願あるいは「敬虔な挨拶」を示す³²。最後に続くとりなしの女神は、両手をあげている。

この三人の人物とシャマシュの描写は、アッカド王朝時代から古バビロニア時代の末まで約1千年間のあいだ、円筒印章に見られる「謁見図」(presentation scene)の構図にもとづいていることが明白である(図3, 4, 5)。とりなしをする



図3 円筒印章(コロソ1996, 図114)



図4 円筒印章(コロソ1996, 図116)



図5 円筒印章(コロソ1996, 図117)

³¹ Seidl 2001, 130は、中央の人物をその外見からナブー・アブラ・イディナ王とみなすことはできず、特定できないとしているが、Woods 2004, 47-49に従う。Slanski 2003, 218は、先頭の人物を具体的な名前はあげず、神殿で儀礼などを行う祭司職の人物、*erib biti* (神殿に入る者、V 20-27など参照)とみなしている。

³² Woods 2004, 45.

神（下位の神）に導かれた礼拝者が主神の前へ進む謁見図は、ウル第3王朝時代に標準化、定型化され、この時代の特徴とみなすことができる³³。

3.5. キャプション(2), (3)と神殿の屋根を形づくる神格化された蛇の形のトルソ

すでに指摘したように、シャマシュの左の頭上に、三日月、星（四個の突起）と波線、星（八個の突起）が描かれているが、これがキャプション(2)でいわれているシン、シャマシュ、イシュタルのシンボルである。この三つのシンボルがこの画面でどのように配置されているのかということキャプション(2)は説明する。

「アプスーと向かい合って」とあるが、アプスーは地面、大地の下にあると考えられている真水である。このレリーフの画面の下の波線部分がアプスーの水域をあらわしている。レリーフの場面全体の土台をなすようにアプスーが配置されている。アプスーの一番下の部分には、等間隔に四つの星が置かれている。この四つの星は東西南北の方位を表す。そこから世界全体を示すと考えられる³⁴。アプスーは、死者の国、夜の星の世界、太陽がないところでもあり、シャマシュが座する場と反対の時空間を示す³⁵。

次に、メソポタミアの伝統的な図像レパートリーのなかには見出されないため、解釈が困難なのが、神殿をあらわす建物の前方にいる二体の上半身姿の物体・像（トルソ、protomes）と屋根を構成している物である。これらは、レリーフのなかに描かれたキャプションとあわせて考察する必要がある。

三つのシンボルが「ニラー（神）（と）柱とのあいだに置かれている」というキャ

³³ コロン1996, 47; 図113-119; Haussperger 1991, 69; Woods 2004, 45; Frechette 2012, 56. 「謁見図」は、英語ではpresentation scene, ドイツ語ではEinführungsszeneとよばれる。Haussperger 1991, 69-77では、Einführungsszene（主神の前へ礼拝者が導かれる図）には、大きく分けると二つの形式があるとし、本来の導入の場面（die eigentliche Einführung）と、崇敬の場面・敬意を表す場面（die Adoration/ Huldigung）に分けることができるとする。前者では、礼拝者はとりなしをする神に手を引かれ、主神の前へ導かれる。後者では、礼拝者は直接主神の前に立ち、とりなしの神は、礼拝者の後方にいる。この崇敬の場面は、礼拝者が（とりなしの神によって）主神の前へ導かれたあと、その神に対して崇敬を表している段階である。このような分類については、Frechette 2012, 59-60も参照。

³⁴ Rashid 1967, 303; Woods 2004, 78ほか。

³⁵ Woods 2004, 78.

プシオン(2)の後半が、この描写を説明している。神殿はキャノピー(天蓋)のようになっているが、これは他に同様の類例はなく独特だという³⁶。神像が神殿のなかの至聖所の玉座にいるという空間が、天蓋と円柱で形成されている。

神殿の屋根の先端にいる、左方向へ向いた二体の像の横顔はほぼ重なり、腕が四本見える。この二体が両手でロープを握っている。ロープは円盤を設置した台座につながっている。二つの顔をもった像の下半身は、神殿の屋根を形づくる蛇となっている。この蛇人間のようなものは、三重の角冠をかぶり、あごひげをはやし、神格化された蛇とみなされ、それがシャマシュの神殿の屋根を形成している³⁷。これがキャプション(2)のMUŠ (muš: 蛇), 蛇の神, ニラーと考えられる³⁸。

キャプション(2)で言及される柱は、神殿の天蓋(屋根)を支える、イオニア式の装飾が柱頭と基部にほどこされた円柱をさす。円柱の側面はナツメヤシの木の子のような模様(パターン化されている)になっている。イオニア式の装飾は、太陽の円盤を支える基部にも用いられており、統一されている。

³⁶ Woods 2004, 59.

³⁷ Rashid 1967, 302 (die Oberkörper zweier bärtiger Götter); Woods 2004, 59 ほか (Woods 2004, 59 n. 178). Jacobsen 1987, 21によると “the two-headed serpent-man, whom an epigraph identifies as the sun-god’s chief constable”.

³⁸ Poebel 1936, 111-112; Jacobsen 1987, 21; Slanski 2000, 110; Slanski 2003, 219; Woods 2004, 66; Borger 2010, 377, MUŠ: ^{dingir}nirah.)

屋根の形を蛇とみなす解釈は、キャプション(2)の2行目のMUŠ (muš: 蛇)にもとづき、古くから文献学者たちによってなされてきた(Seidl 2001, 126)。しかしそのような意見に対し、美術史学の立場からSeidlが、これにはうろこやとぐろを巻く蛇の描写などがないので、古代オリエントの蛇の描写ではないと否定した(Seidl 2001, 126)。Seidlはキャプション(2)の2行目について、最初に提案したKing 1912, 121 n. 2とそれを採用したvon Soden (AHw sub šīāmu(m) Gt)に従っている。

King (1912, 121 n. 2)は, *ina bi-rit ili muš-ti-mi (innadû)* と読み, within the divine judge 「神の裁判官とともに(置かれている)」と訳している。Seidlもこのような読み方にしがたい, “Zwischen den Mušīmu-Göttern” と訳している。*mušīmu* を *šitūmu* “für immer bestimmen” のGtの分詞ととり, 決定する神々, 判決を下す神々ととらえ, 蛇とは関係ないように読んでいる。

それに対してWoods 2004, 62は, *ina bi-rit* ^uMUŠ *ti-mi* (ŠUB.MEŠ-ú) と読む。Kingが*muš-ti-mi* ととらえた単語を, Woodsは二語, ^uMUŠ *ti-mi* ととらえ, between Nirah (and) the pillars と訳している (and をあらわす *u* がいないことについても注釈している, Woods 2004, 62, n. 190)。

神殿の柱をあらわすナツメヤシの木のモチーフは、神殿を支えるものとして古バビロニアの作例に見出されるという。ナツメヤシは多産、繁殖を生み出す象徴と考えられている³⁹。またバイソン人間と支柱をあらわすナツメヤシの木が結びついた作例があり、ここからも古バビロニア的な古代の要素が伝承されていることがうかがわれる⁴⁰。

こうして、「シン、シャマシュ、そしてイシュタルが、アプスーと向かい合って、ニラー（神）（と）柱とのあいだに置かれている。」というキャプション(2)が理解できる。

ニラー神は、蛇の神である。メソポタミアとエラムのあいだの北の境界にある Dēr の都市で崇拝されていた。

そして二つの顔をもち下半身が蛇の姿の像、ニラー神が、(3)のキャプションでいわれている「シャマシュの使者、二つの顔をもった蛇」と考えられる。このニラー神は、シャマシュの祀られた神殿を守り、またシャマシュの象徴である円盤にかかわっており、シャマシュの使者、シャマシュに仕える者という役割を果たしているとみなすことができる。

ニラーはふつう (MUŠ.)⁴¹ MUŠ とつづられる。第3千年紀の文献では、⁴¹MUŠ の読みは複雑で混乱している。このロゴグラムは、神格化された蛇、Nirah ニラー神か、ユーフラテスの西方の支流の神的精霊・守護神のシンボルの Irhan イルハンと読める。イルハン神は、川の曲がりくねった流れから、蛇、蛇行の隠喩となり、また川の自然に満ちる能力が、蛇の再生する力の象徴とみなされるようになる。イルハンの儀礼はウルにおいてのみ知られている。ニラー神とイルハン神はのちには習合し、同一の神ととらえられる。Dēr の都市神の、天（アン）と地（ウラシュ）の息子であるイシュタランは蛇の特徴を持つが、ニラーとイルハンはその息子であり、彼の臣下、使者とみなされるようになる⁴¹。

³⁹ Woods 2004, 59.

⁴⁰ 古バビロニア時代のテラコッタ板では、バイソン人間が、太陽の円盤を柱頭にのせたポールを支えている描写が多いが、さらにいくつかのレリーフでは、ポールの代わりにナツメヤシの幹を支えている場合もある。Woods 2004, figs. 25, 26, 27.

⁴¹ Black/ Green 1992, 166-167; Wiggermann 1997, 42-43; Wiggermann 1998-2001, in: *RIA* 9, 570-573; Woods 2004, 67-71.

シャマシュとニラー神との関連については、太陽神が舟に乗っている描写から解釈できる。その舟はサルゴン時代のニラー／イルハンの描写と類似しており、船首の部分が人間の顔となった姿で描写されている⁴²。シャマシュを乗せる舟が蛇として表現され、そこからニラー神がシャマシュに仕えていることもうかがわれる。

シャマシュは毎晩地下の水域を舟で渡るとされる。そのときにこのような蛇の形をした舟に乗るとすると、蛇の神ニラー神や、川の神イルハンがシャマシュを運ぶということも考えられるだろう。レリーフでは、場面全体の土台をなす波線部分のアプスーから、ニラー神が出現しているように見える。シャマシュとアプスー、夜の——蛇の形をした——ボートの関係も連想される⁴³。

4. 太陽神タブレットに見出される古代的な要素

4.1. ハムムラビ法典碑の図像との比較

とりなしの神とともに人間が主神の前へ歩み寄るといふ謁見図のモチーフや、シャマシュや人物たちの衣服や持ち物の表現、バイソン人間の描写などに、太陽神タブレットの古代的な要素が見て取れる。とりわけこのタブレットの図像については、古バビロニア時代のハンムラビ法典碑（紀元前18世紀、バビロン第1王朝時代、イラン、スーサ出土、玄武岩、高さ225cm、ルーヴル美術館）との類似性がよく指摘される。

バビロン第1王朝の6番目の王として即位したハンムラビは、全バビロニア地方を統一し、巨大な国家を作り上げた（在位前1792-1750年）。彼の統治の末期に成立したハンムラビ法典碑は、おそらくシッパルのシャマシュ神殿に建てられていたと考えられる。

右側の玉座に座しているのが、角冠をかぶった太陽神シャマシュである（図6）。右手には棒と輪を持つ。足元にうろこ状のものが並べられているが、これ

⁴² Woods 2004, figs. 33-37.

⁴³ Woods 2004, 77参照。



図6 ハンムラビ法典碑（部分） スーサ出土 ルーヴル美術館

は先にふれたように神の住む山岳地帯を示す。左側に立つのがハンムラビ王で、祈り、礼拝のしぐさをしている。

太陽神に礼拝者が向かい合う構図で、これも謁見図といえる。太陽神タブレットが古バビロニア時代の枠組みと同様であることが明らかである。約900年間もこのような構図が伝統的な図像としてみなされていたと考えられる。なお、ハンムラビ法典碑と太陽神タブレットの描写の違いとして、ハンムラビ法典碑のシャマシュは、両肩から太陽の光線が発出している、ネックレスを二重にしてつけている、右肩があらわになった衣服を着ている、衣服にひだ模様はなく、膝から下には段状の切込みが入っている、という点があげられる⁴⁴。

ハンムラビ法典碑は、前12世紀にはエラムの王シュトルク・ナツフンテによって戦利品としてスーサに運ばれるのだが、古バビロニア時代からの図像伝

⁴⁴ Woods 2004, 54, n. 149.

承として、同類の図像についての知識をナブー・アブラ・イディナ王時代のエバッバル神殿の祭司たちは共有していたのではないかと推測される。

おそらくハンムラビ法典碑とともにスーサへ運ばれたバビロニアの彫刻作品として、第3千年紀後半／紀元前2000年頃の石碑があるが、そこにも棒と輪を持つ神が描写されている（図7）⁴⁵。

同様にスーサ出土の石碑に玉座に座すシャマシュが描かれているが、これは中期バビロニア時代のもと考えられている（図8）。四重の角冠をかぶり、棒と輪を持つ。衣服は肩が出ておらず、ひだ模様が入ったもので太陽神タブレットと同様で、ハンムラビ法典碑のシャマシュより時代が後であることを示している。ハンムラビ法典碑に代表される図像——神と人間が向き合い、神は棒と輪を持つ——が長く伝承されてきたことがうかがわれる⁴⁶。



図7 石碑 3千年紀 スーサ出土 ルーヴル美術館（Moortgat 1969, pl. 210）

⁴⁵ Slanski 2007, 38, fig. 3-2; Moortgat 1969, pl. 210; Collon 2007, Fig. 7b.

⁴⁶ Seidl 2001, 128-129, Abb. 4; Collon 2007, 63. Woods 2004, 53-38ほか。



図8 石碑 中期バビロニア スーサ出土 (Seidl 2001, Abb. 4)

4.2. エバッバル神殿の神像にまつわる神話と儀礼

太陽神シャマシュは、光、正義、裁き、法、公平、真実、権利の神とみなされている⁴⁷。

シャマシュはシッパルの主神であり、シッパルのエバッバル神殿はシャマシュを祀る神殿である。その神殿のシャマシュ像が消失したことは一大事であり、祭司たちにとってシャマシュ像の再興、エバッバルの儀礼の復興は最大の課題であったといえよう。

太陽神タブレットの碑文テキストの物語にあるように、ユーフラテス川の岸辺で見つかった粘土板の模型・モデルにしたがって、シャマシュ像を制作し、口洗い儀礼(ミース・ピー)⁴⁸を行い、神殿に祀って犠牲を捧げたということは、王や祭司たちが伝統的な儀礼を遵守していることを示す。

⁴⁷ Black/ Green 1992, 182-184; 渡辺2003, 30-33; Krebernik 2009, in *RIA* 12, 599-611など。

⁴⁸ Walker/ Dick 2001; 細田2016ほか。

儀礼や神殿の存立が古来の伝統や権威にもとづくということを示すため、神像モデルの発見という(奇跡)物語も生まれてきたのだろう。ウッズによると、太陽神タブレットの図像の背後には第3、第2千年紀にさかのぼる古代的な要素についての詳しい知識があると考えられる⁴⁹。また実際、古～中期バビロニアの時代の作品(ハンムラビ法典碑の図像と同様な神像表現)を目にしていたことも想定される。エバッバルの祭司たちは、自分たちが受け継いできた古代の伝承や神話、慣習などにもとづいて、神像のモデルの発見によるシャマシュの儀礼像の再興という物語——縁起譚——を作ったと考えられる⁵⁰。

クドゥルといえば、神々の多様な象徴表現が特徴的である⁵¹。たとえば図9では象徴によって神々が表現されている。そのようなクドゥルの図像レパートリーと比べて、この太陽神タブレットでシャマシュは人間の姿で(アントロポモルフィック)大きく描かれている。それは、復古主義的要素によって伝統に忠実であることを明示するためといえる。新しく制作された神像には伝統にもとづく正統性や権威が込められることになる。



図9 クドゥル 紀元前1103-1100年頃
大英博物館 (BM102485)

⁴⁹ Woods 2004, 42, 45-76のレリーフ図像の分析で、さまざまな例をあげている。

⁵⁰ ユーフラテスの西岸で発見されたというシャマシュ像の粘土の模型が残っておらず、それが本当に実在したのかは不明である。そのため、この発見物語は事実なのか、フィクション(pious frauds)なのかという議論がある(Woods 2004, 40-43)。Woods 2004, 81が指摘するように、何か粘土の模型にしたがって新しい神像が作られたということは事実かもしれないが、文学的に構成されたエピソードのように考えられる。Seidl 2001, 129-130はこの話を事実と解している。

⁵¹ Seidl 1989; Bahrani 2008, 162-168ほか。

紀元前1千年紀の神の描写は、象徴的に描かれる傾向があると考えられているが⁵²、伝統が規範としてあることを示し、神像に権威を与えるためには、神人同形に表現することが重要だったといえるであろう。こうして、この石板における古代的な要素、古代回帰の要素は、テキストからも図像からも確かめられる⁵³。

5. 太陽神タブレットの特徴

5.1. 人間の姿をした神像とシンボルの対比

レリーフの中央に描写された太陽の円盤は、碑文テキストのなかで記されている、紀元前11世紀のシムバル・シパク王——海の国の第二王朝の創始者⁵⁴——が設置したもの (*niphu*) と考えられる (I 18-19)⁵⁵。

ストゥ族の攻撃を受けたあと、シムバル・シパク王は、シャマシュの姿・形を探し求めたが、シャマシュはその顔を彼にあらわさなかったため、シャマシュの像と付属品を見つけることができなかった。それゆえシムバル・シパク王は、シャマシュの前にあった太陽の円盤 (*ni-ip-ḫa šá pa-an* ⁴UTU) を組み立てたといわれている (I 13-19)。

太陽の円盤は、シャマシュの像が消失して見つからないため、その代わりに設置されたのである。神殿の至聖所に儀礼像として、であろう。だが、描出されている場面の左側の人物は、ナプー・アプラ・イディナ王とその *šangû* 祭司、つまりシムバル・シパク王から2世紀後の人物とみなすのが妥当だとすると、この時間のずれはどう理解すればよいのだろうか。このレリーフの場面では、円盤は吊り下げられて、設置されようとしているのか、それとも引き上げられ除去されようとするところなのか、という問題が浮上してくる。

⁵² Ornan 2005, 170-171ほか, *RIA* 11, 317 Relief ほか。

⁵³ Woods 2004, 40-43, 45-82; Beaulieu 2013, 125-128; Eppihimer 2014, 336; Sonik 2015, 165-179ほか。

⁵⁴ Frame 1995, 71; Woods 2004, 41.

⁵⁵ Brinkman 1976, 183-184.

スランスキとザイドルは、この場面は太陽の円盤が神殿の中心の場から取り除かれるところ、ロープによって引き上げられるところと解している⁵⁶。

それに対してウッズは、円盤が上から吊り下げられ、台の上に設置されようとしているところとみなしている。シムバル・シパク王の時代から2世紀後、ナブー・アプラ・イディナ王の時代、人間の姿と同形の神像が復元され、その神像が神殿のなかに祀られたとき、それまであった円盤は神像の前——本来の場——に置かれたであろうと考えている。つまりこのタブレットのレリーフは、太陽の円盤とその台座が、それまで置かれていた神殿の至聖所から持ち出され、その神（像）の前に設置されるよう吊り下げられているところ、ちょうど今、台座が正しく置かれようとするところとみなすことができるという⁵⁷。

このようなウッズの解釈も理解できる。神殿建築物の巧みな表現から、太陽の円盤が神殿の前に置かれていることが明らかである。だがしかし4節でみたように、この太陽神タブレットの古代的、復古的な要素に注目するなら、人間の姿をしたシャマシュ像が儀礼像として再び祀られたことがエバツバル神殿にとって最も重要なことといえる。ハンムラビ法典碑にあるように古バビロニア時代から伝承されてきた神人同形の姿のシャマシュ像がようやく再興されると、三人はそれを再び礼拝するため、神殿へ向かっているのである。

神殿の天蓋の一部をなし、神殿の前面でシャマシュ像を守るニラー神は、ロープを握っている。そのロープは、円盤でなく円盤が設置された台座につながれていることに注意しよう。そしてその台座の脚を、祭司ナブー・ナディン・シュミは左手でつかんでいる。すでに指摘されているとおり、この台座の左側の脚の部分が、右側より多少引き上げられていることに注目すると⁵⁸、彼は台座を持ち上げ、太陽の円盤をこの場から取り外そうとしているところではないだろうか。

粘土のモデルが見つかって神像が作られたあと、太陽の円盤がどうなったか、テキストには書かれていない。しかし、テキストに書かれていないが行わ

⁵⁶ Slanski 2000, 111-112; Slanski 2003, 220; Seidl 2001, 130.

⁵⁷ Woods 2004, 51-53, 83.

⁵⁸ Seidl 2001, 124, 130; Slanski 2003/2004, 322; Woods 2004, 51.

れたこと、あるいは想定されていることが、このレリーフの場面に表現されていると思われる。シャマシュ像が復興されたあとは、シャマシュを象徴的に示す太陽の円盤は礼拝の対象としては不要になったため、シャマシュ像の前から取り除かれようとしているとみなすことはできないだろうか⁵⁹。

太陽の円盤は、もともとシャマシュ像の前にあったと考えられるが (I 18)、当初は礼拝の対象とはなっていなかったようだ。シムバル・シパク王がシンボルである円盤を礼拝の対象としたが、今、2世紀後には人間の姿のシャマシュ像が再び礼拝の対象となった。

クドゥルが制作された時代の一部はバビロニアがカッシート王朝の支配下にあった時期と重なる。クドゥルは、カッシート美術を代表する作品である。クドゥルに神々の象徴表現が多いことも、カッシート人による造形表現の特徴といえるだろう。そのようなカッシートの象徴表現の傾向に対して、古バビロニアの神人同形の表現 (アントロポモルフィズム) の伝統に戻ろうとしたのが、エバッバル神殿の祭司たちの動きであったと考えられる。したがって、人間の姿のシャマシュ像の再興、そして象徴表現である太陽の円盤を取り除こうとするしぐさによって、カッシートの表現より、バビロニア本来の伝統的な描写の優位性が示されている。しかも、祭司が円盤を取り外そうとし、王をシャマシュ像の前へ導き入れようとしているふるまいからは、神殿祭司の身分が重要であることも読み取れよう。

T. オルナンは、この太陽神タブレットにおけるシンボルとしての円盤の表現を強調する。太陽神のシンボルである大きな円盤が、画面の中央に置かれているからである⁶⁰。しかしここでは、人間の姿と同形のシャマシュ像のほうがシンボルより重視されているだろう。

それぞれが大きく描かれていることにより、人間の姿をした神像とシンボル

⁵⁹ Slanski 2000, 111-112; Slanski 2003, 220. 先に触れたように、Seidl 2001, 130も、先頭の人物が円盤の象徴をわきへ押しやるところだろうと解釈しているが、三人の人物が誰であるかは明らかにしておらず、説得力に欠ける。このレリーフの太陽の円盤の描写の解釈については、2016年9月の第13回アッシリア学研究会で貴重な意見、示唆を得ることができた。参加者全員に感謝する。

⁶⁰ Ornan 2005, 65-66, 111-113.

という二つの礼拝対象の対比が際立つ。神殿儀礼においてもともと神像の代用だった円盤のシンボルは、伝統的な神像が再興されると、神殿の前からはずされることになる。人間の姿と同形の神像のほうが正統的、伝統的であることが示されている⁶¹。

5.2. 謁見図から礼拝図へ

この太陽神タブレットの特徴は、古代への回帰だけではない。タブレット全体から読み取れるのは、シムバル・シパク王（とそれ以前）の時代とナブー・アブラ・イディナ王の時代の対比である⁶²。それが、レリーフ彫刻における二つの礼拝像・儀礼像の描写の対置にあらわされている。人間と同様な姿のシャマシュ神と太陽のシンボルの円盤という、二通りのモードで表現された神格に対し、このタブレットが制作された時代の人間は、前者のほうに重きを置く。*šangû* 祭司の手の身ぶりから、礼拝の対象物——儀礼像——を選択する、伝統的な神人同形のシャマシュ像を優位に礼拝する、という意思表示が読み取れる。

したがって、この図は謁見図というより、礼拝図・儀礼図といえるのではないだろうか。描かれているのは、太陽の円盤シンボルやシャマシュへの謁見、神の前への入場ではなく、神殿に座す神像への礼拝であろう。さらに、とりなしの神が最後にいて、主神と王とのあいだにいるのは、祭司かつ占師であることにも留意しよう。三人の列の中央の王は、とりなしの神に付き添われ主神の前へ導かれているのではない。三人の身ぶりにはシャマシュ像への祈りや礼拝という行為が前景に出ている。それは、カッシートの神の象徴表現に反対する姿勢でもある。

ウル第3王朝の時代の印章に刻まれた謁見図では、とりなしの神が先頭に立ち、礼拝者を神の前へ導く役割を果たしている。さらに、二人のとりなしの神が礼拝者の前後に立って、神の前へ導く画像も認められる⁶³。とりなしの神が

⁶¹ Pongratz-Leisten/ Sonik 2015, 28-33; Sonik 2015, 172-182.

⁶² Woods 2004, 77もこの二人の王の時代の二重性を指摘している。

⁶³ Woods 2004, 45-48, figs. 9-14; Haussperger 1991, 73-74

神と人間（礼拝者）のあいだの仲介者とみなされていることがわかる（図10）。それに対して、ここでは *šangû* 祭司かつト占師ナブー・ナディン・シュミが神と王とのあいだをとりなしている。テキストで述べられているように、彼が見つけた粘土板のモデルをもとに王は太陽神の神像を作らせ、神殿に祀らせた。このエピソードから、祭司ナブー・ナディン・シュミの役割が重要であることは明らかである。この彫刻レリーフにおいて、王を、シャマシュのほうへ導く祭司は、神のモデルを王に示したというエピソードと関係するだろう。*šangû* 祭司かつト占師・予言者として、神と王とのあいだをとりなす仲介者の役割が強調されている。

と同時に興味深いのは、神の前に進む三人の大きさが微妙に異なることである。とりなしの神，王，*šangû* 祭司かつト占師・予言者という順で大きく描かれている。とりなしの神が人間より大きいことが示唆されている。

三人に対し、シャマシュ像とシンボルが礼拝者よりもずっと大きく描かれており、礼拝の対象となるものの聖性，超越性が表現されている。謁見図から礼拝図へという移行の過程で、神の顕現，ヒエロファニーという概念が意図的に描写されていると考えられる。

このタブレットの図像が礼拝図，儀礼図とみなせることは、他のクドゥルの図像との比較からも明らかとなるだろう。



図10 円筒印章 (Woods 2004, fig. 9)

タブレットのテキストの根本の内容は、王から *šangû* 祭司かつト占師への禄の授与の制定だが、図像は同時代のクドゥルにみられるような授与の場面ではない。土地の（授与ではないが）返還について記されたクドゥルにおいて、王と返還を受ける側とが向き合う場面が描かれているものがある（図11）。二人のあいだで受給権の認定が交わされたことを明白に示す描写である。他方太陽神タブレットでは、神と人間が向き合っている。しかもそのあいだにシンボルがあり、神性なるものの表現が二通りなされている。これらに対して人びとが礼拝、儀礼を捧げていた状況が読み取れる。



図11 クドゥル 紀元前865年頃 (King 1912, pl. CIII)

伝統的な謁見図において神々と人物との関係は、いわば水平的といえる（また謁見図では、謁見の対象が神ではなく、王の場合もある。とりなしの神によって、神ではなく王の前に導かれる人物の描写もある）。だが太陽神タブレットでは、三人の礼拝者の大きさが異なり、さらに礼拝の対象物の大きさも違う。これらの関係について、ウッズは「人間 < 象徴 < 神性」というランク付けがあると指摘している⁶⁴。神性や象徴表現の関係については、個々の描写を検討する必要があるだろう。

他方、天体による神々のシンボルと、アプスーの配置により、この場面は垂直的な広がりも暗示している。「アプスー < 大地 < 天」という空間性も示唆されている⁶⁵。このような空間的広がりのおかげで聖なるものの顕現とそれに対する祈りの身ぶりが読み取れる。

しかしここで、そもそも謁見図や礼拝図という名称で図像を正確に定義できるのか、謁見図と礼拝図とははっきり区別できるのかという問題がある。これらの用語そのものの検討も必要になってくる。ハウスシュペルガーが論じているように、謁見図を時間の経過によって生じる異なる段階の場面——主神あるいは王に謁見しようとする導入の場面と、導かれたあと崇敬の意を示す場面——によって名称を変えることもできる（注33参照）。しかしここでは、謁見より礼拝者の崇敬や祈り、儀礼の行為を強調したい。神への祈り、儀礼というパフォーマンスの表現を礼拝図、儀礼図ととらえよう。祈りや儀礼には神々へ訴えかける力があるということを宗教学的にとらえる観点に立って考察してゆくことが重要だと思われる。儀礼の行為遂行性（パフォーマンスティヴィティ）を考察するうえでも礼拝図、儀礼図という表現をより適切に用いてゆく必要がある。

さらに、とりなしの神の存在そのものの機能も考慮に入れると、謁見図、神と人間との関係も別の面から考察されるだろう。

⁶⁴ Woods 2004, 77.

⁶⁵ Woods 2004, 76-77.

おわりに

この太陽神タブレットがバビロニアのクドゥルという作品ジャンルに属することを考慮すると、テキストの内容と図像の内容がそれぞれ企図にそって構成されていることがわかる⁶⁶。テキストと図像の複合体として、9世紀中葉の祭司たちによる複雑な構想が反映されている。エバツバル神殿の儀礼や神話の伝統、古くから続く神像制作の儀礼や神像への捧げものを重視する態度が明確となった。また、古い時代の図像伝承と同時代の図像の特徴があわせて表現されていることが明らかとなった。謁見図という図像モチーフによりながら、神への祈り、礼拝という意味をより含めた描写に変化している。さらに神々の象徴表現を取り入れている。とりなしの神の位置や、礼拝者と礼拝される神やシンボルの大きさが違うことも注目される。伝統にもとづきながら、本来はバビロニア固有のものではない宗教実践に対する態度や時代に即した新しさが加わっていると読み取れる。

さらに人間の姿をした神像とシンボルという二つの礼拝像の対比の描写が、このタブレットの特徴である。それにより、神への礼拝に加え、シンボルへの礼拝、イメージへの礼拝という考え方が見て取れる。それは神のイメージをどう表現するかということに関連してくるだろう⁶⁷。

太陽神タブレットの特徴をより深く考察するには、他のクドゥルの図像との比較が不可欠である。カッシートの造形表現にもとづいたバビロニアのクドゥルの図像では、神々の象徴表現が独特だが、そのほかの図像モチーフも検討することにより、クドゥル図像学という観点が明確になる。その視点から太陽神タブレットの図像を考察すると、独自性もさらに浮き彫りになるだろう。ク

⁶⁶ 本稿では言及できないが、同時代の四点のクドゥルの図像と比較することにより、このタブレットの特徴が明らかとなるだろう。クドゥルの図像学研究の第一人者である Seidl は、彼女がカタログとしてまとめたクドゥル作品群のなかに太陽神タブレットを含めていない (Seidl 1989)。Seidl 2001の論考にもこの観点が欠けている (Seidl 1989にしたがって Herles 2006も Collon 2007も同様である)。しかし本稿で論じたように、このタブレットはクドゥルの特徴的な要素を持ちこのジャンルに属する。

⁶⁷ Pongratz-Leisten/ Sonik 2015, 28-33; Sonik 2015, 165-172なども参照。

ドゥルとともに、他の作品ジャンルの画像も考慮しながら、メソポタミアにおける神像表現や、イメージへの礼拝について考えてゆく必要がある。

参考文献

- Bahrani, Z. 2008: *The Babylonian Visual Image*, in: Leick, G. (ed.), *The Babylonian World*, New York/ London, 155-170.
- Beaulieu, P.-A. 2013: Mesopotamian Antiquarianism from Sumer to Babylon, in: Schnapp, A. (ed.), *World Antiquarianism: Comparative Perspectives*, Los Angeles, 121-139.
- Black, J.A./ Green, A. 1992: *Gods, Demons and Symbols of Ancient Mesopotamia: An Illustrated Dictionary*, London.
- Borger, R. 2010: *Mesopotamisches Zeichenlexikon. Zweite, revidierte und aktualisierte Auflage*, Münster (AOAT 305).
- Brinkman, J.A. 1968: *A Political History of Post-Kassite Babylonia, 1158-722 B.C.*, (Analecta Orientalia 43) Rome.
- Brinkman, J.A. 1976: A note on the Shamash cult at Sippar in the eleventh century B.C., in: *RA (Revue d'Assyriologie et d'Archéologie Orientale)* 70,183-184.
- Brinkman, J.A. 1980-1983: kudurru A. Philologisch, in: *RIA* 6, 267-274.
- Brinkman, J.A. 2006: Babylonian Royal Land Grants, Memorials of Financial Interest, and Invocation of the Divine, in: *Journal of the Economic and Social History of the Orient* 49, 1-47.
- Brinkman, J.A. 2007: (31) Notes on Three Kudurrus in the Louvre, in: *NABU* 2007, 2, 30-32.
- Brinkman, J.A. / Dalley, S. 1988: A Royal Kudurru from the reign of Aššur-nadin-šumi, in: *ZA* 78, 76-98.
- Collon, D. 2007: Iconographic Evidence for Some Mesopotamian Cult Statues, in: Groneberg, B./ Spieckermann, H.(eds.), *Die Welt der Götterbilder*, BZAW 376, Berlin, 57-84.
- Eppihimer, M. 2014: Posthumous Images and the Memory of the Akkadian Kings, in: Brown, B.A./ Feldman, M.H. (eds.), *Critical Approaches to Ancient Near Eastern Art*, Boston/ Berlin, 319-344.
- Finkel, I.J./ Geller, M.J. (eds.) 1997: *Sumerian Gods and Their Representations*, Groningen.
- Frame, G. 1995: *Rulers of Babylonia: From the Second Dynasty of Isin to the End of Assyrian Domination (1157-612 BC)*, The royal inscriptions of Mesopotamia. Babylonian periods, v. 2, Toronto.

- Frechette, C.G. 2012: *Mesopotamian Ritual- Prayers of "Hand-lifting" (Akkadian Šuillas). An Investigation of Function in Light of the Idiomatic Meaning of the Rubric*, Münster AOAT 379.
- Haussperger, M. 1991: *Die Einführungsszene. Entwicklung eines mesopotamischen Motivs von der altakkadischen bis zum Ende der altbabylonischen Zeit*, München/ Wien.
- Herles, M. 2006: *Götterdarstellungen Mesopotamiens in der 2. Hälfte des 2. Jahrtausends v. Chr.. Das anthropomorphe Bild im Verhältnis zum Symbol*, Münster.
- Hurowitz, V.A. 2000: Boundary Stones. The "sun disk" tablet of Nabû-apla-iddina, in: Hallo, W.W.(ed.), *The Context of Scripture II*, Leiden, 364-368.
- Jacobsen, T. 1987 : The Graven Image, in: Miller, Jr. P.D/ Hanson, P.D./ McBride, S.D. (eds.), *Ancient Israelit Religion. Essays in Honor of Frank Moore Cross*, Philadelphia 15-32.
- King, L.W. 1912: *Babylonian Boundary Stones and Memorial Tablets in the British Museum*, London.
- Krebernik, M. 2009: Sonnengott. A. I. In Mesopotamien. Philologisch, in: *RIA* 12, 599-611.
- Matsushima, E. 1993: Divine Statues in Ancient Mesopotamia. Their Fashioning and Clothing and Their Interaction with the Society, in: Matsushima, E. (ed.): *Official Cult and Popular Religion in the Ancient Near East*, Heidelberg, 209-219.
- Matsushima, E. 1995: Eleven Neo-Babylonian texts relating to the Lubuštu (clothing ceremony), in: H.I.H.Prince T. Mikasa (ed.): *Essays on Ancient Anatolia and its surrounding civilizations*, Wiesbaden, 235-243.
- Mettinger, T.N.D. 1995: *No Graven Image? Israelite Aniconism in Its Ancient Near Eastern Context*, Stockholm.
- Moortgat, A. 1969: *The Art of Ancient Mesopotamia*, London.
- Ornan, T. 2005: *The Triumph of the Symbol. Pictorial Representation of Deities in Mesopotamia and the Biblical Image Ban*, Göttingen (OBO 213).
- Poebel, A. 1936: Critical Notes. The Beginning of the Fourteenth Tablet of Harra Hubullu, in: *The American journal of Semitic languages and literatures* 52 (2), 111-114.
- Pongratz-Leisten, B. / Sonik, K. (eds.) 2015: *The Materiality of Divine Agency*, Studies in Ancient Near Eastern Records (SANER) 8, De Gruyter, Berlin/ New York.
- Pongratz-Leisten, B. / Sonik, K. 2015: Between Cognition and Culture: Theorizing the Materiality of Divine Agency in Cross-Cultural Perspective, in: Pongratz-Leisten, B. / Sonik, K. (eds.) 2015: *The Materiality of Divine Agency*, 3-69.
- Powell, M.A. 1991: Narām-Sîn, Son of Sargon. Ancient History, Famous Names, and a Famous Babylonian Forgery, in: *ZA* 81, 20-30.
- Raschid, S.A. 1967: Zur Sonnentafel von Sippar, in: *Berliner Jahrbuch für Vor- und*

Frühgeschichte 7, 297-309.

Rassam, H. 1897: *Asshur and the Land of Nimrod*, New York.

Reschid, F./ Wilcke, C. 1975: Ein 'Grenzstein' aus dem ersten (?) Regierungsjahr des Königs Marduk-šāpik-zēri, in: *ZA* 65, 34-62.

Seidl 1957-1971: Göttersymbole und -attribute, in: *RIA* 3, 483-498.

Seidl, U. 1989: *Die babylonischen Kudurru-Reliefs. Symbole mesopotamischer Gottheiten*, Fribourg/ Göttingen (OBO 87).

Seidl, U. 1980-1983: kudurru B. Bildschmuck, in: *RIA* 6, 275-277.

Seidl, U. 2000: Babylonische und assyrische Kultbilder in den Massenmedien des 1. Jahrtausends v. Chr., in: Uehlinger, C. 2000, 89-114.

Seidl, U. 2001: Das Ringen um das richtige Bild des Šamaš von Sippar, *ZA* 91, 121-132.

Slanski, K.E. 2000: Classification, Historiography and Monumental Authority. The Babylonian Entitlement *Narūs* (*Kudurrus*), *JCS* 52, 95-114.

Slanski, K.E. 2003: *The Babylonian Entitlement Narūs* (*Kudurrus*). *A Study in Their Form and Function* (American Schools of Oriental Research Books - ASORB 9), Boston.

Slanski, K.E. 2003/2004: Representation of the Divine on the Babylonian Entitlement Monuments (kudurrus): Part I: Divine Symbols, in: *Archiv für Orientforschung* 50, 308-323.

Slanski, K.E. 2007: The Mesopotamian 'Rod and Ring': Icon of Righteous Kingship and Balance of Power between Palace and Temple, in: Crawford, H. (ed.): *Regime Change in the Ancient Near East and Egypt*, Oxford/ New York, 37-59.

Sonik, K. 2015: Divine (Re-) Presentation. Authoritative Images and a Pictorial Stream of Tradition in Mesopotamia, in: *The Materiality of Divine Agency*, Pongratz-Leisten, B./ Sonik, K., Berlin/ New York, de Gruyter, 142-193.

Walker, C./ Dick, M.B. 2001: *The Induction of the Cult Image in Ancient Mesopotamia: The Mesopotamian Mīs Pī Ritual*, Helsinki.

Wiggermann, F.A.M. 1992: *Mesopotamian Protective Spirits. The Ritual Texts*, Groningen.

Wiggermann, F.A.M. 1997: Transtigridian Snake Gods, in: Finkel, I.J./ Geller, M.J. (eds.) 1997: *Sumerian Gods and Their Representations*, 33-55.

Wiggermann, F.A.M. 1998-2001: Nirāḥ, Irḥan, in: *RIA* 9, 570-574.

Wiggermann 2006-2008: Ring and Stab, in: *RIA* 11, 414-421.

Woods, C.E. 2004: The Sun-God Tablet of Nabû-apla-iddina Revisited, in: *JCS* 56, 23-103.

コロン, ドミニク 1996 『円筒印章 — 古代西アジアの生活と文明』 久我行子訳, 東京美術 (Collon, D. 1987: *First Impressions: Cylinder Seals in the Ancient Near East*, London)。

細田あや子2016「古代メソポタミアの神像の口洗い儀礼」『人文科学研究』138, 141-176.

前川和也編著2011『図説メソポタミア文明』河出書房新社。

松島英子2001『メソポタミアの神像——偶像と神殿祭儀』角川書店。

渡辺和子2003「メソポタミアの太陽神とその図像」松村一男・渡辺和子編『太陽神の研究』下巻, リトン, 25-62.